

「漁港・漁場の施設の設計参考図書」書籍版 主な変更点1

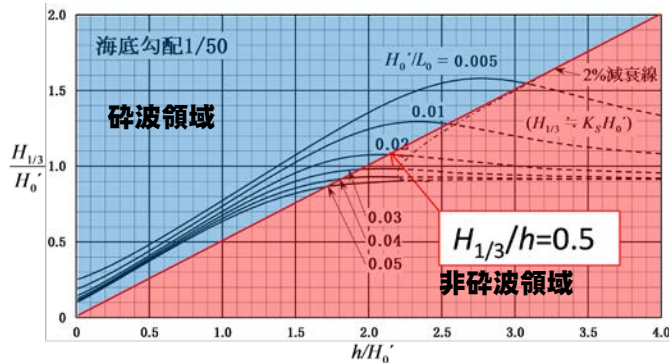
書籍版の発刊にあたっては、既に公表済みの水産庁ホームページ版(平成27年7月17日)から、図表や文体等の体裁を整えることとあわせ、若干ながら内容の更新を行っています。主な変更点については、次のとおりです。

- ① 砕波・非砕波に関する領域の考え方について「砕波の影響を受ける領域」「砕波の影響を受けない領域」へ表現や考え方を統一しました。

【H. P. 版】(P794)

砕波領域と非砕波領域を式 16-2-1 により区分し、設計流速を算定することができる。

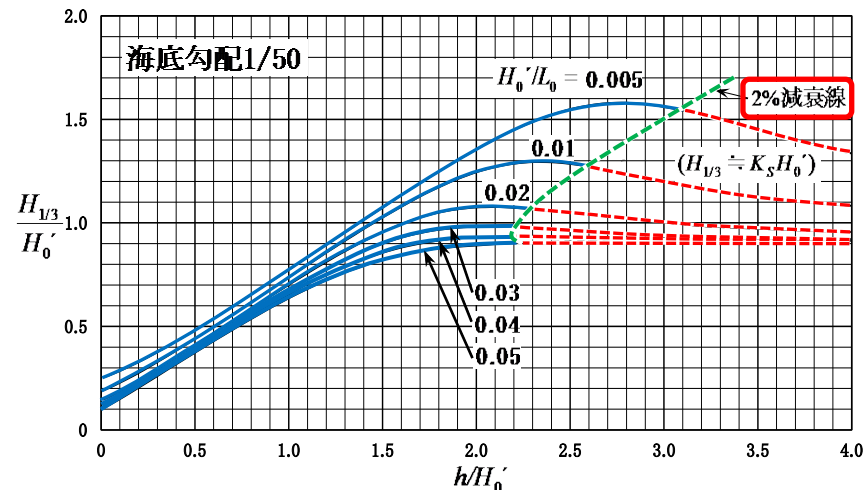
$$\frac{H}{h} \begin{cases} \geq 0.5 \\ < 0.5 \end{cases} \text{----- (式 16-2-1)}$$



(第16編 2.2.4 着定基質の設計流速の算定手法)

【書籍版】(P813)

砕波の影響を受ける領域と受けない領域は波高変化図(図 2-3-12)中に示されている 2%減衰線の左側と右側である。



②その他誤解を招く表現の修正や説明の追記をしています。

(1)波高変化図について

(第2編3.5.3(1)①波高変化図の考え方)【H.P.版】(P66)、【書籍版】(P65)

砕波による波高変化図は、合田³⁸⁾が砕波の理論モデルによって、計算した不規則波の波高変化を示したものである。図中の一点鎖線より右の領域における波高変化は「本編 3. 5. 2 浅水変形」における浅水係数を用いて計算できるが、一点鎖線から左の領域では砕波による波高変化が卓越するので、これらの図を用いて波高を決定することができる。~~さらに、この波高変化図は、砕波に伴うウェーブセットアップ及び波の不規則性に起因するサーフビートを考慮したものとなっております。~~ ~~ウェーブセットアップ及びサーフビートを含まない水深hで有義波高_{1/3}を算定することができる。~~

← 修正

(2)波圧算定式について

(第2編4.2.1(3)直立壁に作用する波圧)【H.P.版】(P84)、【書籍版】(P84)

H_d : 設計で用いる進行波としての有義波高(m)

$\lambda_0 H_d$: 波圧の計算に用いる波高(m)

(砕波の影響を受ける領域では壁体前面から5波高沖までの区間(図2-4-5参照)の $\lambda_0 H_d$ の最大値、砕波の影響を受けない領域では壁体前面位置における $\lambda_0 H_d$ の値とする)

← 追記

(3)津波引き波時の性能照査フロー図について

(第6編5.4.4(1)性能照査フロー並びに設計条件)【H.P.版】(P554)、【書籍版】(P569)

津波非越流時は通常の残留水位又は津波最大水位

← 追記